

〈研究ノート〉

## 『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』 に見るユグノーの経済的貢献

金 哲 雄

### I

展覧会「静かなる征服：ユグノー 1685～1985年」(The Quiet Conquest: THE HUGUENOTS 1685 TO 1985) が1985年5月14日、ロンドン博物館 (Museum of London) において開催された。それは、ナント勅令廃止 (Ré cation) 300周年記念行事の一つで、ロンドン・ユグノー協会 (Huguenot Society of London) との共催で組織された。ロンドン・ユグノー協会もまた、その100周年を祝賀していた。テサ・マードック (Tessa Murdoch) によって作成されたカタログには、公的あるいは私的な所蔵品から借用してきた475点以上の資料、品物、肖像画や芸術作品を収集しよう、とした組織者の重要な考えがうかがえる。そこには、ラ・レーヌ (La Reine) のもの含まれており、フランス・プロテスタンティズム史協会 (Société d'Histoire du Protestantisme Français) からの貸与も忘れてはならないだろう。そのカタログ『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』<sup>(1)</sup> では、亡命者としてフランスを出国したユグノーが、イギリスにおいて果たした貢献が考察されている。その内容は次のとおりである。

前書き

財政的援助者

カラー・プレート

カタログ : 寄付者のエントリー・リスト

歴史的背景 : ユグノー、フランスにおける礼拝、迫害、(聖) パルトロマ

---

(1) *The Quiet Conquest: THE HUGUENOTS 1685 TO 1985*, (Museum of London, 1985).

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

イ日の大虐殺、ナント勅令廃止、荒野の教会、寛容、散住

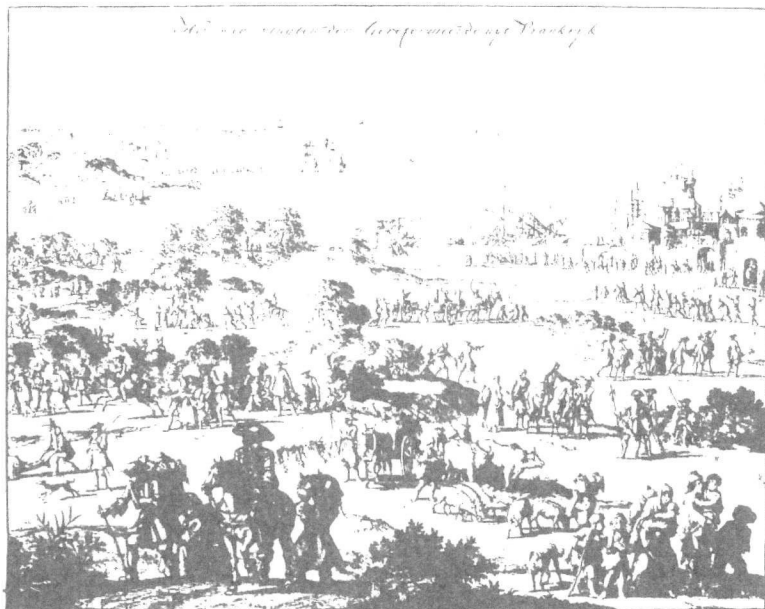
ユグノーの制度：教会、教会組織、礼拝と礼拝式、聖餐皿、チャリティー、フランス病院、教育

ユグノーの貢献：忠誠、イギリス軍におけるユグノー、ロンドンにおけるユグノー、医学、科学、ユグノーと演劇、文学者と好古学者、彫版工と版画販売人、印刷業者・製紙業者・書籍販売人と製本者、ユグノーとイギリス建築聖マーティンズ・レーン・アカデミー (STMARTIN'S LANE ACADEMY)、家具と木製品、彫刻、銃製造業者、金銀細工師、クロック・ウォッチ製造業者、宝石細工師、細密画、ガラス、シティー商業、陶芸、絹織物工業におけるユグノー、織物と服飾品、19世紀におけるユグノーの遺産

貸出リスト

索引

Plate1 ユグノーの逃亡 Jan Luyken 作の版画 1696年



出所: *The Quiet Conquest: The HUGUENOTS 1685 TO 1985* p. XIV,

「前書き」において、イギリスへのユグノーの亡命過程とその特質について次のように述べられている（Plat1参照）。

「なぜ彼らはイギリスに來たのか？多くはオランダ、プロシア、スイスに定着した。イギリスとすでに商取引関係にあった人々、例えばルーアンの商人イサック・ケユエル（Isaac Caillouel）にとっては、性質上財産を輸送し、個人的な輸送を整理することは、おそらく比較的容易であった。……ユグノー亡命者たちは16世紀後半以降、イギリスに引きつけられ、ロンドン、南東部のカンタベリー（Canterbury）、サウサンプトン（Southampton）、ノーリッジ（Norwich）に到來していたユグノーの定住コミュニティに合流していった。ロンドンにおける最初のユグノー教会は、1550年に設立された。

さらに、これら初期亡命者の多くの末裔はその時まで、同国人を支え得る重要な地位を占めていた。イングランド銀行の創立者の一人でその初代総裁であったジョン・ウーブロン（Sir John Houblon）は、17世紀中葉までロンドン・シティにおいて高い地位についたワロン（Wallon）一族のメンバーであった。ブヴリー（Bouveries）一族はもう一つの著名な家族で、1690年代までレヴァント会社（Levant Company）の支柱であった。1695—1700年にロンドン・シティートの議会メンバーであったトマ・パピヨン（Thomas Papillon）は、1588年にイギリスに移住してきたダヴィド（David）・パピヨンの息子であった。……

なぜユグノーはイギリスに定住することが奨励されたか？エドワード・ウォートレイ・モンタギュ（Edward Wortley Montagu）は、フランス・プロテスタントの帰化について提案した際に、次のような法令によって国家に生じる利点を示した。『……プロシア国王は、……それ（ユグノー移住を奨励すること——金）によって、ほとんど不毛の国を豊かにし、商業を改良し、国家収入を大いに増加させた。……彼らは（ユグノー——金）は、保護・奨励される専制国家（Despotick Government）の下で定住するならば、疑いもなくますますイギリスに影響を及ぼし、彼らの産業（Industry）をもたらすだろう……』

さらに、ユグノーは、その勤勉さによって名声を得た。これは、労働に高い価値を与え、それを『神による使命の実践』、それゆえ礼拝（Divine Worship）

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

として見なすカルヴィニズムの倫理の結果であった。……ユグノーの生活方法のもう一つの著しい特徴は、教会の民主主義的な組織化であった。……ユグノーの社会生活は、まったく同じ方法で組織化されていた。……究極的にユグノーは彼自身の救いを考え出す責任があり、大グループの亡命者に共通する、この責任性によって、崇敬、清純、まじめ、儉約、勤勉、誠実というユグノーの特質は生み出された。……

フレンドリー協会 (Friendly Societies)、ユグノー・マソニック・ロッジ (Masonic Lodges)、そして主としてフランス病院 (French Hospital) のようなこれらの支持グループは、この国に定着したユグノーの記憶が今日でも崇敬されるような興味を抱かせてくれる。ロンドン・ユグノー協会が1885年、ナント勅令廃止の200年祭の記念物として『これらの尊ぶべき人々』における研究と関心を促すために、フランス病院の院長によって設立された。300年記念祭は、主要な国際展覧会 (イギリスの文化、工業、金融における広範囲に及ぶユグノーの貢献を調査した最初のもの)、国の広範囲に及ぶユグノー遺産の軌跡 (Heritage Trail)、ロイヤル協会 (Royal Society) での歴史的会議 (Historical Conference) によって適切に示された。『ユグノー遺産』というタイトルの下でなされた、これらの活動は、ナント勅令廃止において絶頂に達した迫害の結果として、イギリスを生活の場にした最初の亡命者の末裔によって組織された。』<sup>(2)</sup>

このようにユグノーの移住は16世紀中頃から開始され、1660年以降に再来し、1700年頃には約2万人のフランス・プロテスタントが、約40の英国国教会あるいは非英国国教会のなかに分散するようになった。これらのユグノー亡命者たちは、彼らの受け入れ先で「静かなる征服」に取りかかったのであった。このロンドンの展覧会では、技術と経済、知的・文化的・芸術的な諸活動、そして社会政治的思想におけるユグノーの積極的な貢献が力説されているのである。

---

(2) *The Quiet Conquest*, pp. XI-XIV.

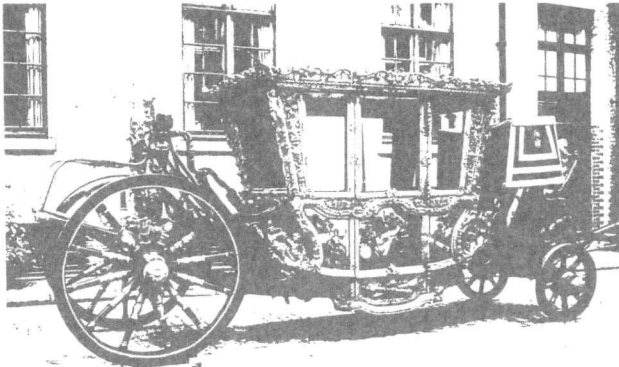


II

この展覧会は、1986年の『フランス・プロテスタントティズム史協会会報』<sup>(3)</sup>によって次のように紹介されている。

ユグノー手工業者の家族たちは、彼らが影響を及ぼした多数の職業を示すだろう。すなわち、ロココ式の紹介者である高級家具師ペルチエ (Pelletier) とパスカル (Pascal)、現在でも依然として下院議長 (le Speaker de la Chambre des Communes) によって使用されている、ウィリアム (ギヨーム、Guillaume) 3世の公式馬車をデザインしたダリエル・マロ (Daniel Marot) (Plate2参照)、光学器械を製造したドロン (Dollond) 親子、P. クレスパン (Crespin) と P. ド・ラムリー (de Ramerie) のような無数の金銀細工師、小教区の記録に60以上の名が記載されている時計屋と宝石商、カラー印刷を移植した T. ヴォトロリエ (Vautrollier) と J. C. ルブロン (Leblond) のような印刷業者、イングランド銀行券の製造を検査するポータル (Portal) 家の人々のような製紙業者、ガラス製造業者、製陶業者、毛織物製造業者と絹織物製造業者である。

Plate 2 元来ウィリアム3世のため Daniel Marot によって  
デザインされた下院議長の公式馬車 1698年



出所 : *The Quiet Conquest*, p. 12

(3) “EXPOSITION Le tricentenaire de la Révocation commémoré à Londres en 1985,” *Bulletin de société d'histoire du protestantisme français*, 132(1986), pp. 445-446.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

科学の分野においてもまた、フランス・ユグノーとその末裔は名を上げている。すなわち、マイエンヌ（Mayenne）出身のテオドール・チュルケ（Theodore Turquet）と、後のドロース（G. Delaune）のような医者、保険計理の先駆者アブラハム・モワヴル（Abraham Moivre）などの数学者、有名なドニ・パパン（Denis Papin）、ニュートンの友達である、ラ・ロシェル（La Rochelle）出身のジョン・テオフィリュ・デザギュリエ（John Theophilus Desaguliers）のような物理学者などである。この展覧会では、ユグノーの彫刻家や画家の作品も展示された。例えば、フランソワ・ルビリヤック（François Roubilliac）による、ボルドー出身の俳優ダヴィド・ガリック（David Garrick）の金めっきしたブロンズ像である。当時の偉大な人々が、ジャン・カヴァリエ（Jean Cavalier）、ダヴィド・ル・マルシャン（David Le Marchand）、ジャン・オブリセ（Jean Obrisser）、イサック・ゴセ（Isaac Gosset）のような芸術家によって蝋で造形された。とくにこれらの芸術家のおかげで、ナント勅令廃止前後に亡命し、イギリスに軍事指導力をもたらした偉大な大尉たちの肖像画が保存されている。

### III

ロンドンにおけるユグノーの貢献については、『静かなる征服』のなかで以下のように概観されている<sup>(4)</sup>。

ロndonは1680年代と90年代、ユグノーの亡命者を引きつけた。ロンドン は救済の中心地で、シティーのスレッドニードル街（Threadneedle Street）の郊外と、ウェストミンスター のサボワ（Savoy）の、最も重要な二つのフランス教会の基地であった。そして、そこでは無類の雇用機会が与えられた。結局、現代の大ロンドン地域と、その二つの郊外、スピタルフィールズ（Spitalfields）とソーホー（Soho）において約2万ないし2万5000人のユグノーが存在し、フランス語会話が鳴り響いていた。

フランスのコミュニティーは、それぞれ著しく異なっていた。最大のコミュニ

---

(4) *The Quiet Conquest*, p. 111.

ニティーであるスピタルフィールズは、織物商に大いに依存していた。ワンズウォース（Wandsworth）にある最も遠いコミュニティは、帽子製造業者で有名であった。最も変化に富んだコミュニティは、ソーホーが基地になっている西部の郊外にあった。そこでは、多くの分野の商業が展開されていた。それらがもたらされた共通の要因は、その市場であった。というのも、議会や王室のジェントリーがフランスの最新ファッションを歓迎したからである。チェルシー（Chelsea）では植木屋、グリニッジ（Greenwich）ではガラス製造業者、ロンドンの多くの郊外では先生たちがいた。最も富裕なグループはシティーをたびたび訪れる商人から構成されており、彼らの多くはイングランド銀行の資本や、新たな世界の公債株式に貢献した。ユグノーたちは、工場や教会のみならず、ロンドンのコーヒー店やマソニック・ロッジ（Masonic Lodges）で出会った。

イギリス人が注目したように、大きなコミュニティは、ナント勅令廃止後半世紀の1730年代には、著しくフランス的であり続けた。しかし、それらはその後の30、40年間、崩壊していった。スピタルフィールズの亡命者たちは、ソーホーのグループほどは同化しなかった。ソーホーのグループは、イギリス人の顧客とより直接的に結びついており、英国国教会とのより強い関係をもっていたからである。ともあれ、ロンドンに定住したすべてのユグノーの末裔たちは、18世紀第三・四半期までフランス語をあまりよく知らなくなり、そしてイギリス社会に同化していったのであった。

#### IV

ユグノー系の彫版工たちは、さまざまな職業に特別な貢献をなした。イサック・バジール（Isaac Basire, 1704-1768）は四世代の異なった彫版工のうち最初の世代で、彼の息子と孫は考古学者協会（Society of Antiquaries）と密接な関係の下で働いた。ポール・フルドリニエ（Paul Fourdrinier）は建築計画に従事した。1680、90年代に装飾に関する見本帳を刊行したシモン・グリブラン（Simon Gribelin）もまた、本の図版用のデザインを彫った。フランシス・ヴィ

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

ヴァール (Francis Vivares) は、後に「イギリスの風景彫版術の父」(Father of English Landscape Engraving) と認められた。ジョン・ロック (John Rocque)、フランシス・ヴィヴァール、J.B.C. シャトラン (Chatelain) は、パリの最も流行しているデザインを刊行し、彫版することによって、イギリスにおけるロココ式の普及に重要な役割を果たした。画家フィリップ・メルシエ (Philip Mercier) の妻であるドロチ (Dorothy) ・メルシエと、ユグノー彫刻家ルイ・フランソワ・ルビリアックの友であるセレスト・レニユイエ (Celeste Regnier) の両者は、ヨーロッパ大陸風の彫版を専門に扱う版画店を経営した<sup>(5)</sup>。

ユグノーの印刷業者、製紙業者、書籍販売業者や製本屋については、次のように述べられている<sup>(6)</sup>。

フランスでは、ユグノーは印刷業や書籍販売業から閉め出されていた。その結果、印刷業者と書籍販売業者はオランダやイギリスに移住し、そしてそこで外国の文献に対する需要や、新たな印刷方法を移植する機会を見いだした。トマ・ヴォトロリエ (Thomas Vautrollier) は16世紀末、ロンドンに定着し、カルヴァンの「綱要」(‘Institutes’) の英語版とラテン語版を印刷した。18世紀初期には、ジャック・クリストフ・ル・ブロン (Jacques Christophe Le Blon) が、1719年に特許を得た、カラーの新たな印刷方法を移植した。

ユグノーは、イギリスの製紙業における改良に貢献した。彼らは、「白紙製造会社」(White Paper Maker's Company) の支配下で工場を創設した。サウサンプトン (Southampton) 近くのサウス・ストーンハム (South Stoneham) でジェラルド・ド・ヴォー (Gerard de Vaux) は1707年、アンリ・ポータル (Henry Portal) を徒弟として雇用した。ポータルは1712年、彼自身の工場を設立し、イングランド銀行券用の紙を製造していた。

ロンドンでは、亡命の書籍販売業者は主としてストランド (Strand) に定着した。フランソワ・ヴァイヤン (François Vaillant) は、以前にソーミュール (Saumur) のプロテスタント・アカデミー (Protestant Academy) に対する書籍販売業者であったが、1686年にストランドに書店を開業した。その店はほとん

---

(5) libid., p. 161.

(6) libid., p. 175.

ど80年間、家族所有の下にあり続けた。主要な製本屋のなかには、16世紀末のジャン・ド・ブランシュ（Jean de Planche）や、1832年にロンドンで製本屋として開業したユグノーの末裔ロベール・リヴィエール（Robert Riviere）が含まれていた。

## V

ユグノーとイギリスの建築については、次のように語られている<sup>(7)</sup>。

ウィリアム3世に仕える建築家として、ダニエル・マロは国王の公式馬車とそのインテリアの備品、そしてハンプトンコート王宮（Hampton Court Palace）の庭園設計をデザインした。そこではマロの花壇デザインは、ユグノーの門細工師ジャン・チジュ（Jean Tijou）による精巧な鉄製品によって完成された。マロはまた、ロンドンのモンタギュ・ハウス（Montagu House）居住のラルフ（Ralph、ウィリアム3世の衣装部屋係りで後のモンタギュ公爵）のために働いた。マロは、一つの部屋のすべてが同じ人でデザインされるべきであるという考えを、イギリスの建築に取り入れた最初の人物であった。このことは、18世紀末の偉大な二人の建築デザイナーであったウィリアム・ケント（William Kent）とロバート・アダム（Robert Adam）によって実践に移された。

ダニエル・マロの影響は1688年以降、数多くの地方の家において見られる。あまり知られていないユグノーの建築家サミュエル・オーデュロワ（Samuel Hauduroy）とジャン・ド・ボド（Jean de Bodi）は、ヨークシャーのディルハム・パーク（Dyrham Park）、エイヴォン（Avon）とウェントウォース・キャッスル（Wentworth Castle）のためのデザインを生み出した。ユグノー亡命者の石彫師ナドール（Nadauld）は、ウィリアム・タルマン（William Talman）とジョン・ヴァンブリュージュ（John Vanbrugh）と合同して、シャッツウォース（Chatsworth）とキャッスル・ハワード（Castle Howard）の外面に装飾的な彫刻を刻んだのだった。

---

(7) Ibid., p.183.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

家具や木工品についても、ユグノーの貢献が確認されている<sup>(8)</sup>。

ダニエル・マロの彫刻デザインは、18世紀初期の20年間に製造された家具にとくに影響力をもち、そしてキャビネット製造業者ペルチエ家のような木彫師、室内装飾業者によって使用された。マロは家具商と親密な関係を有し、そして彼の妻のゴル（Goles）家は、オランダ系であったが、フランスの王室に仕えたキャビネット製造業者であった。

ユグノーの第二世代は、彫刻術と金箔の技術の伝統を維持し、ロココ式の彫刻と骨組製造の発展にきわめて大きな役割を果たした。骨組製造人ジェームズ・パスカル（James Pascall）はリーズ（Leeds）のテンプル・ニュサム・ハウス（Temple Newsam House）におけるロココ式の有名な一式の家具を製造した。ユグノーの手工業者はまた、装飾用の紙粘土（papier-mâché）の用途を発展させた。そして1784年まで、木彫師ウィリアム・コレット（William Collett）は、彼の技術の使用される機会が減少した結果、ウェストミンスター（Westminster）のフランス・プロテスタント慈善学校（French Protestant Charity School）に彼の息子を入学させざるを得なかったのである。

## VI

フランスの銃製造業者は傑出しており、ルイ14世治世期、短銃などの火器のデザインや完成度において新たな水準を示した。パリの二人の指導的な銃製造業者ピエール・モンロン（Pierre Monlong）、ピエール・グリュシェ（Gruché）はユグノーで、ロンドンに亡命地を求めた。これら二人ともソーホーに定着し、銃製造業者のワーシップ会社（Worship Company）の支配外に置かれた。ロンドンにおける他の指導的なユグノー製造業者イサック・ド・スレ（Isaac de Seret）とランドルヴィル（Landreville）の両者は、フランス地方出身のデヴォンシャー（Devonshire）の第一公爵によって保護された。彼らが製造した銃は、高水準の装飾を施した、独創的な方法と結びついていた。第二世代のユグノー銃製造

---

(8) *ibid.*, p. 199.

業者のなかには、ヘンリー・ドラニー (Henry Delany)、ピエール・ガンドン (Gandon)、イスラエル・セガラ (Israel Segallas) が含まれている。19世紀初期においてさえ、指導的なピストル製造業者の一人イサック・リヴィエール (Isaac Riviere) はユグノーの末裔であった<sup>(9)</sup>。

イギリスへのユグノーの貢献は、銀製品に最もしばしば関係している。ユグノーの金銀細工師は、迫害のみならず経済的理由によってイギリスに引きつけられた。ルイ14世は、オランダ戦争の資金を調達するために、フランスのすべての金銀製の食器類を溶かすように命じ、いかなる金細工師のさらなる雇用を禁じた。ロンドンのユグノー金銀細工師は、ヨーロッパ大陸においても評判を得、後にその製品を輸出するようになった。彼らは、主として地方の都市リール (Lille)、ルマン (Le Mans)、メス (Metz)、ルーアン (Rouen) の出身者で、その初期の浮き彫り作業にとって代わる、銀を鑄造する新たな熟達技術をもたらした。最良の熟練職人たちは、まもなくイギリスの貴族やジェントリーの保護を受けるようになった<sup>(10)</sup>。

ユグノーの金銀細工師は、新たな形態、すなわち巡礼瓶、ヨーロッパ大陸において養母に伝統的に与えられた小鉢 (écuelle、二つの取っ手付きの小鉢)、そして船形ソース皿を移植した。それらの製品は、その形態や均整の純粹さ、その装飾の威厳によってイギリスの市場を獲得した。彼らはまた、イギリスの新たな需要に出会った。フランスではタンカードは、ビールを飲むことが習慣化されていなかったの、あまに使用されていなかった。しかし、ルーアン出身のある亡命者の息子ジャコブ・マルガ (Jacob Margas) は、特別に上質なサンプルを製造した<sup>(11)</sup>。

ジャコブは1717年、スレッドニーデル街のフランス教会のため聖餐杯を製造した。それは、その教会の長老によって提供されたものであった。他のユグノー

(9) Ibid., p. 223.

(10) *The Quiet Conquest*, p. 229; Tessa Murdoch, "THE QUIET CONQUEST THE HUGUENOTS 1685-1985," *HISTORY TODAY*, (MAY, 1985), p. 32.

(11) Ibid.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

金銀細工師ブゼ・ピヨー（Pezé Pilleau）は、義歯製造を専門とするルマン出身であった。同名の息子はこの技術を受け継ぎ、そして彼の商業カード（trade card）では、彼の供給した人工歯が決して自然のものと見分けることができないと主張された。メス出身の他の金銀細工師ダビッド・ウィヨーム（David Willaume）は、ポーターリングトン（Portarlington）のフランス教会のため聖

Plate 3 Paul de Lamerie 作の銀製カップとふた 1730 年



出所 : *The Quiet Conquest*, p.239



餐皿を製造した。彼は非常に成功を収めたので、退職してベッドフォードシャー (Bedfordshire) におけるチングリス (Tingrith) の荘園を所有し、そしてイギリスのジェントリー地主に加わることができた<sup>(12)</sup>。

他方、ロンドン土着の金銀細工師は、この新たな歓迎せざる競争者に反対し、ユグノーに対抗する一連の請願書を「金銀細工師会社」(Goldsmiths' Company) に提出した。彼らのなかには、慎重にユグノーの様式を模倣する者もおれば、ユグノーの職人を雇用する者さえいた。ユグノーの金銀細工師たちは、緊密なコミュニティを維持し、他の子供たちに対して教父としての役割を果たし、そして彼ら自身の息子たちを徒弟として引き受けた。彼らの技術は次の世代に受け継がれ、1730年代と40年代において二人のユグノー、ポール・クレспан (Paul Crespin) とポール・ド・ラムリー (Paul de Lamerie) (Plate3参照) はロココ式の銀製品の指導的製造業者であった。18世紀の第3・四半期に製造された新古典主義様式における最良の銀製品のいくつかは、ユグノーの金銀細工師によるものであった<sup>(13)</sup>。

## VII

ユグノーの亡命者はまた、クロック製造業者として働いていた。宗教改革時代、フランスのクロック製造業者はプロテスタントであった。フランスの地方都市ブロワ (Blois) とラ・ロッシュェル (La Rochelle) は、17世紀初期におけるプロテスタンティズムとウォッチ製造の両者の中心地であった。ナンサッチ (Nonsuch) でヘンリー8世によって雇用されていたクロック製造業者は、エリザベス1世治世時のクロック製造業者ニコラ・ウルソー (Nicholas Urseau) と同様に、ユグノーの移住者であった。1627年まで、ロンドンの自由クロック製造業者 (Free Clockmakers) は、「フランスのクロック製造業者の侵入によってとても圧迫を受けている」と不満をもらした<sup>(14)</sup>。

---

(12) libid.

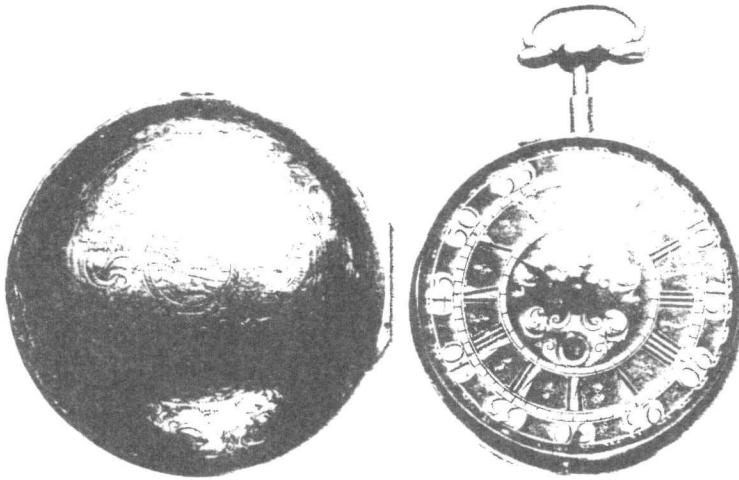
(13) libid.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

金銀細工師と同様に、これらの地方のウォッチ製造業者は、ロンドンに亡命地を求めた。その首都の広範な市場は、彼らの手工業ための挑戦的な販路を供給した。ロンドン博物館は、これらユグノーの製造によるウォッチをかなり所蔵している。ある上質な金製のケース付きウォッチ（pair-case watch）は、シモン・ド・シャルム（Simon de Charmes）によって製造された（Plate 4 参照）。彼は、チャリング・クロス（Charing Cross）、ウォリック（Warwick）街の角にある「クロック」の標識のある場所で働いていた。彼は1730年、グロヴ・ホール（Grove Hall）、ハマー史密斯（Hammersmith）を建て、そこで隠居した<sup>(15)</sup>。

40名以上のウォッチ製造業者の名前が1680年以降、ユグノー教会の記録に記載されている。そのなかには、パリ出身のド・ボフル（De Baufre）家も含ま

Plate 4 Simon de Charmes 作の金製ケース付きウォッチ 1700 年



出所 : *The Quiet Conquest*, p.245

(14) *The Quiet Conquest*, p.243; Murdoch, op. cit., p. 32.

(15) *Ibid.*

れていた。彼らは、ウオッチに軸受け石をはめる機械装置に関するニコラ・ファシオ (Nicolas Facio) の考案を発展させるのに貢献し、1704年にはそれに対する専売特許証を取った。ロンドンにおける時計工業の発展は、フランスの手工業者の移住に大いに負っている。18世紀初期までフランス当局は、ヴェルサイユにおけるフランスのクロック製造業を回復させるために、イギリスのクロック製造業者を招かねばならなかった<sup>(16)</sup>。

亡命者の金銀細工師やウオッチ製造業者のほかに、ロンドンは宝石細工師、ウオッチケース製造業者、かぎたばこ入れ製造業者、あるいは贅沢な金属細工品のデザインを作る彫刻師さえ含んだ専門の手工業者を受け入れた。したがって、1680年代と1690年代にロンドンで刊行された、シモン・グリブラン (Simon Gribelin) の見本帳は、宝石細工師とウオッチ製造業者の両者によって使用された。ジョン・オブリセ (John Obrisset) は、1705年から1728年までにたばこ入れのためにデザインされた角製の、ベッ甲製の箱を生産した。第二世代の亡命者ポール・ダニエル・シュヌヴィ (Paul Daniel Chenevix) とトマ・アラシュ (Thomas Harrache) は、銀製品と宝石からドレスデン (Dresden) 磁器と小像のブロンズ製品までの広範囲の贅沢品を供給する商店を運営していた。テシエ (Tessier) の商会は、ある亡命者の孫息子ルヴィ (Lewis) ・テシエによって設立された<sup>(17)</sup>。

## VIII

ガラス製造業におけるユグノーの貢献は、とくに16世紀に関して詳細に述べられている<sup>(18)</sup> (Plate 5, 6 参照)。

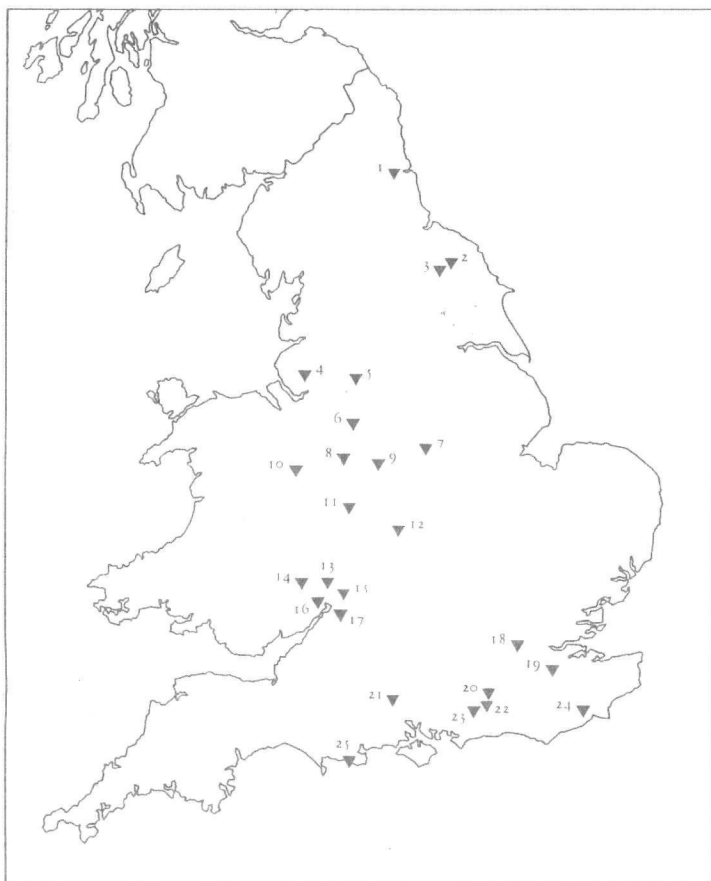
ネーデルランド、ノルマンディー、ロレーヌ出身の16世紀のプロテスタントがイギリスのガラス製造業においてなした貢献は、歴史的に重要である。ノルマンディーとロレーヌは、窓ガラスで有名であった。ノルマンディーの特権4

(16) Ibid.

(17) *The Quiet Conquest*, p.255.

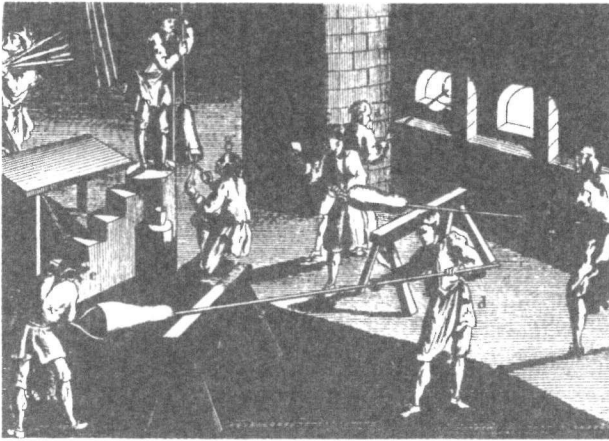
(18) Ibid., p.265.

Plate5 ユグノーのガラス製造地 1567—1620年



- |   |  |  |
|---|--|--|
| 1 NEWCASTLE-UPON-TYNE<br>(1617-) COAL       | 9 BAGOTS PARK  | 17 WOODCHESTER                             |
| 2 ROSEDALE                                  | 10 RUYTON-XI-TOWNS                                   | 18 SOUTHWARK<br>(1615-) COAL               |
| 3 HUTTON COMMON                             | 11 KINGSWINFORD,<br>NEAR STOURBRIDGE<br>(1612-) COAL | 19 KNOLE                                   |
| 4 BICKERSTAFFE                              | 12 ASHOW, KENILWORTH                                 | 20 ALFOLD                                  |
| 5 HAUGHTON GREEN,<br>DENTON<br>(-1653) COAL | 13 NEWENT  | 21 BUCKHOLT                                |
| 6 BIDDULPH<br>NEAR CONGLETON                | 14 ST WEONARDS                                       | 22 WISBOROUGH GREEN                        |
| 7 WOLLATON<br>(1612-1617) COAL              | 15 GLOUCESTER<br>(-1696-) COAL                       | 23 PETWORTH                                |
| 8 BISHOPS WOOD,<br>ECCLESHALL               | 16 NEWNHAM-ON-SEVERN<br>(-1696-) COAL                | 24 NORTHAM                                 |
|   |  | 25 KIMMERIDGE<br>(1615-1623)<br>SHALE COAL |

Plate6 18世紀におけるガラス製造



出所 : *The Quiet Conquest*, p.264

家族カクレ (Caqueray)、ブrossール (Brossard)、ボンガール (Bongard)、ヴァイヤン (Vaillant) は、吹き、加工することによって「クラウン」(crowns、大きな円いディスク) を製造していた。一方、ロレーヌの家族ビスヴァル (Bisval)、エネザル (Hennezal)、ティトリー (Thiéttry)、ティサック (Thysac) は、ガラスの長い円筒を吹くことによってブロード・ガラス (broad glass) を生産していた。「食卓用器具や他の小さな製品」(Menu verre) は、ウ (Houx) 家、マセ (Massey) 家、ビゴール (Bigault) 家、ボニー (Bonny) 家、フィナンス (Finance) 家、ヴィニオン (Vinions) 家のようなフランドルのガラス製造業者によって作られていた。

アントワープにおけるガラス製造業の中心地から来たアラス (Arras) 生まれのジャン・カレ (Jean Carré) は1567年、「宗教的理由」でイギリスへ亡命し、そしてロンドンでは高級鉛ガラス用のヴェネツィア炉一つと、サリーサセックス (Surrey-Sussex) のファールンフォールド (Fernfold) では窓ガラス用の炉二つをつくるための許可を得た。ボンガールによって経営されていたクラウン・ガラス工場は17世紀においても存続したが、しかしブロード・ガラスの企業は

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

まもなく、良質な通常のグリーン・ガラス (green glass) 製の容器を生産していたグループによって取って代わられた。カレは1572年に亡くなるまで、その当時の完全なガラス製造法、その熟練労働者、その必要な資本を移植したのであった。

1570年代と1580年代の移住者は、特許によってもはや保護されなかったので、炉用の材木と、ガラスの市場を見つけ得る所ならどこでも移動した。ユグノー経営の、窓ガラスやグリーン容器ガラス用の小さな炉の足跡は、イギリスの多くの地域で見ることができる。ガラス製造業者の増加、いかなる特権の保護の欠如、イギリスの燃料用森林の使用に対する反対の激化、より経済的な石炭の使用の影響によって、ガラス製造の組織化において変化が生じた。

延臣企業家に認められていた、新たなシステムである工業上の独占は、「貴族ガラス製造業者」(gentihommes verriers) の弟子たちによって強く反対された。彼らは、イギリスのガラス製造業を新たな段階へ押し上げていたからであった。彼らのほとんどはしだいに、ロバート・マンセル (Sir Robert Mansell) に支配されるようになった。しかしながら、ティザック (Tyzacks) 家とアンゼ (Henzeys) 家は、17世紀においてスツアープブリッジ (Stourbridge) とニューカッスル (Newcastle upon Tyne) のガラス製造業を設立したことが依然として思い出される。そして、ユグノーの末裔はごく最近まで、イギリスのガラス製造業において見出すことができる。

ボルドー北部のサント (Saintes) 出身の陶工ベルナール・パリシー (Bernard Palissy 1510-1590) の製作品はフランスで国王の愛顧を引きつけ、17世紀のイギリスでは名声を博し、そして19世紀において再び関心を抱かせた。17世紀後半においてダニエル・マロのデザインは、デルフト (Delft) の工場で青や白のスズ塗りの陶器を生産していたアドリアニュ・コック (Adrianus Kocks) によって使用された。イギリスにおいてユグノーの第二世代は、ダービー (Derby) とシェルシー (Chelsea) の磁器工場の設立に決定的な役割を果たした。そこではニコラ・スピリモン (Nicholas Sprimont) は、モデルとクロック機械装置のため他のユグノー手工業者を招いた。ステファン・テオドール・ジャンサン (Stephen Theodore Janssen) とデルマン (Delmain) は1750年代初期、バターシー

(Battersea) のヨーク・ハウス (York House) でエナメル塗料の事業を開始した。ロンドンにおける独立したエナメル塗料工のなかには、ジュネーヴで養成されたジャン・ミュサール (Jean Mussard) や、アントニー・トルジャン (Anthony Tregent) が含まれていた。これらの手工業者のうちには、最初は宝石細工師として養成された者もいた。ある宝石細工師に年季奉公に出されたジェームズ・ジル (James Giles) は、彼の父と同様に、彼自身の生涯においてかなり承認された、磁器の独立した装飾業者になった<sup>(19)</sup>。

## IX

ナント勅令廃止以降約50年後の1730年代さえ、ある匿名のパンフレットは、外国人に対するあまりにも大きな寛大な対応から生じる損害について、次のように注意を促していた。「フランス人がすべての人々のうちで最も企業心に富み、最も勤勉で、儉約的であればあるほど、ますます我々は、彼らのデザインを妬み、彼らが権力、利益、信用のある地位につくのに反対する根拠をもつ。彼らの節約、勤勉を考慮に入れるならば、まもなく彼らは、すでに絹織物工業においてなしたように、すべての営利な商業に集中するだろう。というのも、その商業の10分の9は彼らの手中にあり、ワイン取引ではかなりのシェアをもっていることが証明され得ると考えるからである。彼らの人数は重要である。……彼らの節度、節食、そして女性の多産を考慮するならば、まもなくシティーは、おそらくフランスのコロニーと呼ばれるだろう」<sup>(20)</sup> と。

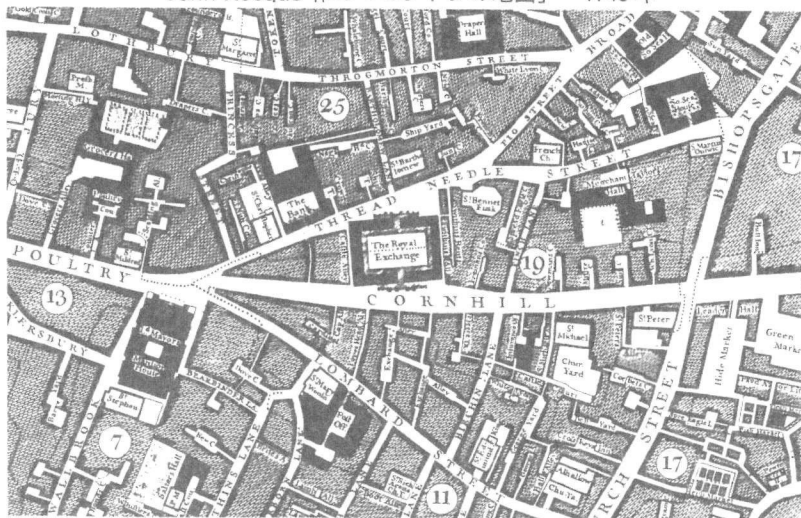
ワイン商におけるユグノーの支配については、資料に基づいて判断するのは難しい。確かに、ボルドーからの亡命者ダヴィド・ガリック (David Garrick) の祖父は、ワイン商人で、そしてガリック自身、代理商に乗り出す前はその商業に従事していた。クルトール家の創建者オギュスタン・クルトール (Augustin Courtauld) は、ラ・ロッシュェル近くのイル・ドレロン (Ile d'Oléron) 出身の

(19) Ibid., p. 267.

(20) Murdoch, op. cit., p. 32.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

Plate 7 Thtendneedle Street のフランス教会を示す  
John Rocque 作の「ロンドンの地図」 1746年



出所 :The Quiet Conquest,p.275

ワイン商人であった。そして、シティに基盤を有するシャリエ（Chalié）家は、18世紀後半における指導的なワイン商人であった<sup>(21)</sup>。

シティの商業・金融業におけるユグノーの貢献については、次のとおりである<sup>(22)</sup>。

1690年代は、経済学と国際貿易において革命的な年代であり、銀行、公債株式、新金融手段や公債の新たな世界を導入した。最も富裕なユグノーの大部分は商人であり、スレッドニードル街のフランス教会（Plate7参照）における長老メンバーであった。彼らのなかには1698～1700年、ロンバード街（Lombard Street）の絹織物商人エチエヌ・セニョレ（Etienne Seignoret）（約9万ポンドの財産を所有）、1732年に死ぬまで10万ポンドにも達する資産の所有者ダヴィド・ボザンケ（David Bosanquet）、そして5000ポンド以上の資産を所有していた他の約20のメンバーが含まれていた。

(21) Ibid., pp.32-33.

(22) The Quiet Conquest, p.275.



Plate 8 John Castaing 作の外国為替相場表 1698 年

( 1 )  
The Course of the Ex-  
change, and other things.

London, Tuesday 4th January, 1698.

Amsterdam	35	9a 10
Rotterdam	35	11a 36
Antwerp	35	9a 10
Hamburgh	35	2d 3
Paris	47	$\frac{1}{4}$
Lyons	47	$\frac{1}{4}$
Cadiz	51	4d 51
Madrid	51	$\frac{1}{4}$
Leghorn	52	$\frac{1}{4}$
Genova	51	$\frac{1}{4}$
Venice	49	$\frac{1}{2}$
Lisbon	5	7 $\frac{1}{2}$
Porto	5	6 $\frac{3}{4}$
Dublin	16	$\frac{1}{2}$
Gold	4	l. 00 s. 6 d.
Ditto Ducats	4	5 6
Silver Str.	5s.	1 d. $\frac{1}{2}$ a 2 d.
Foreign Bars	5	3 $\frac{1}{4}$
Pieces of Eight	5	3 $\frac{1}{8}$

	Saturd	Monday	Tuesd.
Bank Stock	86 $\frac{1}{2}$ a 4	86 $\frac{1}{4}$ a 1	86 $\frac{3}{4}$
India	53 $\frac{1}{2}$	53 $\frac{3}{4}$	53 $\frac{1}{2}$
African	11 $\frac{1}{4}$	11 $\frac{1}{4}$	11 $\frac{1}{4}$
Hudson Bay	110	110	110
Orphans Chamb.	53	53	53
Blank Tick.M.L.	6 15	6 15	6 15

No Transfer of the Bank till January 7.

In the Exchequer Advanced.	Paid off.
1st 4 Shill. Aid--	1896874
3d 4 Shill. Aid--	1800000
4th 4 Shill. Aid--	1800000
$\frac{1}{4}$ Custom	567985
New Custom	1250000
Tobacco, &c.	1500000
$\frac{1}{2}$ Excise	999815
Poll-Tax	569293
Paper, &c.	324114
Salt Act	1504519
Low Wines, &c.	69559
Coal Act & Leath.	56400
Births and Marr.	650000
3 Shill. Aid--	150000
Malt Act--	200000
Exchequer Notes, bank	5850000

Count'd in the Tower, last Week, 1698.

By John Castaing, Broker, at his  
Office at Jonathans Coffee-house.

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

1690年代にユグノーの商人は、新たなイングランド銀行へ重要な寄付を行った。それは、対フランス戦争に資金を供給する手助けとなった。ユグノーの123家族によって最初に申し込まれた出資金は、所持された資金の10%に相当した<sup>(23)</sup>。イングランド銀行の創設時の取締役24名のうち7名が、ユグノー系、あるいはワロン系であった。彼らのなかには、1万ポンドを寄付して総裁（1694－97年）になったジョン・ウーブロン、彼の兄弟ジェームズ（James）とアブラハム（Abraham）が含まれていた。

ユグノーは保険に積極的に従事した。18世紀においてボザンケ家の後継者は、Royal Exchange Assurance の取締役であった。仲買人ジョン・カステン（Jhon Castaing）は1697年、‘The Stock Exchange Daily Official List’ として今日まで継続している「外国為替相場表」（Course of the Exchange）を刊行し始めた（Plate8参照）。18世紀後半においてカズノヴ（Cazenove）家のメンバーは、ジュネーヴを後にしロンドンへ向かった。フィリップ（Philip）・カズノヴは1823年、Cazenove & CO. という企業を設立した。この企業は1984年、紋章の許可を受け、この名誉を成し遂げた最初のシティー株主仲買人たちであった。

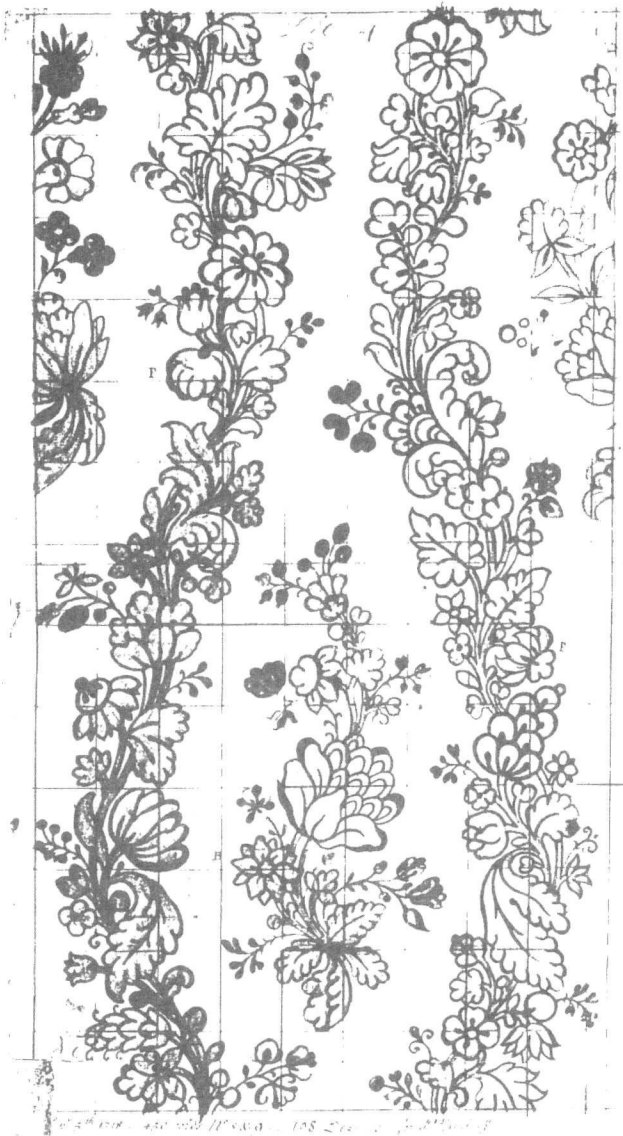
## X

最初はキャンタベリー（Canterbury）そして後にはスピタルフィールズに集中した、織物工業へのユグノーの貢献はきわめてよく知られている。幸いにも、親方織工（master weavers）の家の多くは、ロンドンのある地域に今日でも見ることができる。ロンドンでは、一連の亡命者が保護され、それゆえ再建に悩まされることがなかった。ユグノーの家族は、その地域のフランス教会と、そしてスピタルフィールズで新たに建てられたキリスト教会（Christ Church）に出席し、そこで彼らの多くは埋葬された。スピタルフィールズの「スープ」（‘Soupe’）のほかに、支持グループにはフレンドリー協会（Friendly Societies）

---

(23) “EXPOSITION Le tricentenaire de la Révocation commémoré à Londres en 1985,” p.446.

Plate9 James Leman 作の絹織物用デザイン 1718 年



出所 :The Quiet Conquest,p.291

が含まれていた。その協会は、同じ出身者のグループによって結成され、病人や貧困者に対して財政的援助を与えていた。パリ人の協会（Société）は1687年、おそらくロンドンで設立された。そのすべてのメンバーは61名に限られ、メンバーの質向上のため18世紀半ばまで、ユグノーは18歳から41歳までの信頼できる、心身とも健全で、そしてスピタルフィールズのキリスト教会から3マイル以内に居住している者であるべきだとされた<sup>(24)</sup>。

1670年代から1770年代までユグノーの集団は、ロンドンの絹織物工業におけるきわめて重要な部分であった。その亡命者のほとんどは、商人、親方織工、あるいは様々な織物工業の職人であった。しかしプロテスタントは、リヨンの「大製造所」（‘Grande Fabrique’）へ加入することが禁止されていたので、ほとんどは絹織物のマニュファクチュアにおける経験がなかった。彼らはおおむね、フランス北部、低ポワトゥ（Bas Poitou）、あるいはニーム（Nîmes）の出身で、一、二人だけがリヨンとの結びつきがあった。そこには、密輸業者セニョレ（Seignoret）、模範市民ジョン・サバチエ（John Sabatier）が含まれていた。彼らは、資本と企業精神を持ち込み、多くの移住者と同様に、彼らの新たな国に対してきわめて忠実であった。アムステルダムを経由して、またキャンタベリーにおける数年の居住後にロンドンに來た者もいた。多くは、オジエ家（Ogiers）のように、ロンドンにすでに居住していた親戚に加わるようになった。「織工会社」（Weaver Company）によって外国の親方として受け入れられた、最も成功を収めた人々の多くは1740年、その組合に加入し、1760年代危機の数年間においてその業務を支配した。彼らはあらゆる部門、黒（Black）、無地（Plain）、装飾（Fancy）、花模様（Flowered）の部門に入ったが、しかし、それぞれの部門における織工の多数派は依然として、イギリス人であった。最も有名なデザイナーのうちに、ユグノーがいたのであった<sup>(25)</sup>（Plate9参照）。

1745年の『ロンドン官報』（*London Gazette*）では、スピタルフィールズにおけるユグノー親方の数と経済力が示されていた。彼らは全体で、約2000人の労働者に職を提供していた。12人以上の労働者を雇用していた者は、次のとお

(24) Murdoch, op. cit., p. 33.

(25) *The Quiet Conquest*, p. 289.

りである。そのリスト全体の約5分の3は外国名で、彼らはイギリスの製造業者に比して約2倍の労働者を雇用していた<sup>(26)</sup> (Plate10参照)。

スピタル広場 (Spital Square)、プリンス街 (Princes Street)、教会街 (Church Street) におけるユグノーの親方職工は、すばらしい家 (その地区がスラム化された以降、織工の屋根裏は19世紀の建て増しであった) に住み、貧困街から

Captain James Dalbiac	80	Peter Delamare and Co.	22
Peter Campart	74	Peter Maillard	21
Daniel Gobbee	70	James Gautier	20
Lewis Chauvet	65	Jacob Jamet	20
Godin and Ogier	60	John Batcheler	19
Abraham Jeudwine	60	Lewis Desormeaux	19
John Rondeau	57	James Ouvry	19
Peter Auber and Son	52	Peter Lekeux	18
Benjamin Champion	50	John Maze	17
Peter Ougier	50	James Pigne	17
Daniel Pilon	49	James Roberdeau	17
John Luke Landon	48	James Auber	16
Daniel Mesman	48	John Ogier	16
Abraham Deheul	47	Riviete and Ogier	16
Daniel le Vautier	47	Paul Auder	14
Obadiah Agace and Sons	41	Ann Barbutt	14
Samuel Alavoine	39	Abraham Ravenel	14
Lewis Chevelier	38	Judith Sequeret and	
Samuel Savage	36	Bourdillion	14
Chantrey & Co.	35	Isaac Dupree	12
John Ouvry	35	Peter Duthoit, sr.	12
John Sabatier	34	Gabriel Grillier	12
Daniel Cabbinell	30	John Lamy	12
Bigot and De Lavau	30		
Daniel Pineau	29		
Peter Abraham Ogier			
and Sons	28		
James Lardant	27		
Peter Bourdon	26		
Simon Dalbiac, jr.	25		
Nicholas Hebert	25		
James Maze	25		
James Maze	24		

(26) *The Quiet Conquest*, p.98; Robin Gwynn, *The Huguenots of London*, (1998), pp.37-38.

## Plate10 Spitalfields における製造業者のリスト 1745 年

The following Association of the Manufacturers and others inhabiting in or near Spital Fields, (who to their several subscribed Names have added the Numbers of Men each Manufacturer proposes to raise for his Majesty's Service,) has been presented to his Majesty by Mr. Alderman Baker, accompanied by a numerous Body of Gentlemen, being introduced by the Right Honourable the Earl Waldegrave, one of the Lords of his Majesty's Bed Chamber in Waiting: Which Association his Majesty was pleased to receive very graciously.

Christ Church, Middlesex, Sept. 26, 1745.

WE whose Names are hereunto subscribed, Manufacturers and others inhabiting in or near Spital Fields, in the County of Middlesex, duly considering the great and many Blessings we enjoy under his most sacred and illustrious Majesty King George, think it our Duty, (at this Time more especially) to manifest our inviolable Attachment to his Person and Government. We do therefore declare our utter Detestation and Abhorrence of the unnatural Rebellion now carried on in Favour of a Popish Pretender, or some of his Family: And we do, as much as in us lies, solemnly promise and engage ourselves to stand by each other to the utmost of our Power and Ability, to defend his Majesty's Person and Government, by inducing our several Workmen, Servants and Dependants, to take up Arms with us whenever called thereto by his Majesty, against all his Enemies, both Foreign and Domestic.

A LIST of such Manufacturers and others inhabiting in or near Spital Fields, together with the Number of their Workmen, Servants and Dependants, who have been engaged by their Masters to take up Arms when called thereto by his Majesty, in Defence of his Person and Government.

John Peck	20
Reynolds and Bray	107
John and Robert Turner	102
Peter Campion	74
Captain James Dalbanc	80
Joan Baker	75
John Tall	9
Robert Lee	41
Thomas Jervis	4
Daniel Pilon	42
Daniel Gobbee	70
George Garrett	20
Peter Nouvilles	3
Captain Ogier	60
Elizabeth and Joseph Green	32
John Lamy	17
James Roberdeau	11
George Farmer	

John Maze	17
James Gaudier	20
John Sabatier	34
Thomas Beck	10
Samuel Alavoine	30
John Rondeau	57
Jeremiah Mather	18
Rene Turquand	4
Abraham David, jun.	9
James Maze	23
James Beuzeville	5
John Payton	47
Riviere and Ogier	16
Abraham Dupree	3
Thomas Jones	6
Jacob Jamet	20
Peter Abraham Ogier and Sons	28
John Ogier	16
James Martell	9
Daniel Pineau	29
Henry Cline	3
James Auber	10
John Luke Landon	48
Ephraim Flammar	2
Chantry and Co.	35
Peter Pontie	9
John Frederick Bernard	9
Peter Gallott	4
Lewis Chauvet	65
Lewis Desormeaux	10
Ann Barbott	14
Lewis Chevelier	38
Simon Dalbanc, jun.	25
Abraham Newhouse	18
Abraham Deheal	47
Henry Napton	10
John Campion	4
Thomas Triquet	7
Judith Sequeret and Boardillon	14
James Maze	24
James Johnson	70
Francis Chanfat	6
Thomas Turner	13
John Ward	4
Samuel Savage	36
Bigot and De Lavau	30
Nicholas Hebert	25
Gabriel Pomier	8
James Ouvry	10
Peter Ougier	50
Peter Ferree	2
John Gibbon	10
John Ouvry	35
Peter Farques	3
Benjamin Champion	50
Guy Bryan	4
John Powell	33
Peter Delamare and Co.	22
John Defole	8
Daniel Giles	40
Samuel Worral	7
Paul Auder	14
John Shields	5
Gabriel Grillier	12
Mathurin Rivalin	4
Obadiah Agice and Sons	41
John Roy	10
John Batcheler	19
William Smith	8
Thomas Rogers	12

Thomas

出所: The Quiet Conquest, p.98

ユグノーとイギリス人の職人を雇用していた。保守的な見解の彼らは、その地域のフランス教会とスピタルフィールズのキリスト教会の両者に仕え、そして彼らのコミュニティーのみならず、その地区の貧困者を支えたのであった。結局、彼らの収益は、家の財産と共同基金になった。ごくわずかな例外を除けば、18世紀末までほとんどは、イギリスの知的中産階級と融合していった<sup>(27)</sup>。

スピタルフィールズのすべての織工が、シティーの絹織物商に供給され、またアメリカ大陸へ輸出される花模様の絹織物生産に関与していたわけでもなかった。その展示会におけるつつまじやかな種目の一つが、ジョン・ラミー (John Lamy) の業務用名刺であった (Plate 11 参照)。彼はハンカチの織工で、ガン街 (Gun Street) のブルー・ボール (Blue Ball) において1755年から1777年まで記録されている。その家族は、サントンジュ (Saintonge) とアングモワ (Angoumois) の協会メンバーであった。そして、ヘンリー・ラミーは1865年に奉公に出された際に、織工の息子として記述されていた<sup>(28)</sup>。

それらの織工たちはまた、特別な関心をもち、暇な時間に会って様々な趣味について議論し合った。1717年に設立された「数学協会」 (Mathematical Society) は、モンマス街 (Monmouth Street) のモンマズ・ヘッド (Monmouth's Head) で最初に開かれた。1735年には、そのメンバー数は64名 (8の乗数) に限られた。この協会におけるメンバーの一人が、ジョン・ドロンド (John Dollond) であった。彼はユグノーの織工で、天体望遠鏡を発明した。彼の息子ピーター (Peter) は1750年、スピタルフィールズのヴァイン街 (Vine Street) おいて小さな光学器械の作業場を開設し、そして後にストランド街 (Strand) へ移動した。彼はドロンドとエイトシュイソン (Aitchison) という企業を創設し、それらは今日でも依然として繁盛している<sup>(29)</sup>。

---

(27) *The Quiet Conquest*, p. 289.

(28) Murdoch, *op. cit.*, p. 33.

(29) *Ibid.*

『静かなる征服：ユグノー 1685～1985年』に見るユグノーの経済的貢献

Plate11 ハンカチ織工 John Lamy の業務用名刺 1749 年



出所: *The Quiet Conquest*, p.294

## XI

以上のように、『静かなる征服』を通してイギリスにおけるユグノーの経済的貢献を見てきた。これらは、イギリスがユグノーを温かく迎え入れたことと関連していた。その歓迎ぶりは、ユグノー以外の移民グループに対する対応の仕方とは著しい対照をなしていたという。そのいくつかの理由については、Philippa Stewart, *Immigrants* (1976) によって次のように述べられている。

「17世紀末になると、イギリス人はカトリック教徒に激しい敵意をいだいていた。……イギリス人のこうした反カトリック感情は、ユグノーへの残虐行為と相まって、ユグノーの苦境に同情を呼び起こす働きをした。

ユグノーの来英は1688年で、名誉革命と時を同じくしている。……ユグノーは、名誉革命において顕著な役割を果たした。たとえば、オレンジ公ウィリアム随行の主力二個連隊には、ユグノー移民が配置された。ユグノーは、ウィリアム国王の政府では重要な地位を与えられ、以前の移民グループのようにねた



まれることもなく、待遇面では優先的な扱いをうけている。

だが、ユグノーをイギリスが歓迎した最も大切な理由の一つは、17世紀のイギリスが繁栄し拡大の途上にあったからであろう。……国民一人一人が十分に経済的恩恵に浴することが出来る状況にあったので、ユグノー移民は持てる技術を提供してイギリス社会全体に利益をもたらすことになった<sup>(30)</sup>。

事実、ユグノーは、大きく変化するイギリス社会のなかで、とくに産業革命の到来を告げる時期に、その変化を先頭に立って推進するという重要な役割を担っていたのである<sup>(31)</sup>。

---

(30) フィリップ・スチュワート著、山岸勝榮・日野寿憲訳『イギリス少数民族史』こびあん書房、1988年、39－40頁。

(31) なお、イギリスにおけるユグノーの経済的役割については、金哲雄「イギリスにおけるユグノーの経済活動」大阪経済法科大学『経済学論集』第19巻第3・4合併号（1996年3月）参照。